

# ヨエル書とラオディキアのセブンスデー・アドベント教会 - 第十七号

Jeff Pippenger

2025-12-23

## 第十七番

前回の記事は、アブラムとパウロの預言に関する考察を未完のまま終えた。これらを一ひとつ積み重ねていくと、30年に続いて400年がある、計430年の期間が導き出される。神学の世界には、30年を400年の後に続く期間だと見る人もいるだろうが、一般に論じられる際には、その30年は期間の冒頭に位置づけられている。400の後に30なのか、30の後に400なのか。答えは、30の後に400である。30年の期間が確かに存在し、それに結びついて第二の預言的期間が後に続くことを示す証言が多数あるからだ。

創世記41章46節によれば、ヨセフがファラオに仕える務めを始めたのは三十歳であった。そして七年の豊作が始まり、その後に七年の飢饉が続いた。三十歳のとき、キリストの型としてのヨセフの後に、2520日に及ぶ二つの期間が続いた。キリストが三十歳のときには、その後に1260の二つの期間が続き、それらを合わせると2520となる。これはさらに、二つの王国に対する七つの時と結び付く。

ダビデは三十歳で王となり、サムエル記下5章4節に記されているように四十年間治めた。ダビデはキリストの型であり、キリストが三十歳のとき、洗礼を受け、その後四十日のあいだ荒野に追いやられた。そして、その洗礼によって予表されていた復活の後、キリストは四十日のあいだ弟子たちのもとに留まり、直接彼らを教えた。十字架においては、憐れみによりエルサレムの滅びは四十年間猶予され、これは彼らの契約の歴史の初めに、荒野で四十年のあいだ人々が死に絶えていったことと並行している。

エゼキエルは、エゼキエル書1章1節にあるように、三十歳のときに預言者として召された。ここではエゼキエルの三十歳以降の時期については扱わないが、彼の預言活動がどれほど続いたかについて、確立された事実にもとづく簡潔なAI要約を挿入しておく。「エゼキエルの預言は旧約聖書の中でも日付が最も正確に示されているものの一つであり、書全体で13の具体的な日付が示されている。これらはすべてエホヤキンの捕囚の年（紀元前597年を第1年とする）から起算され、およそ22年間にわたる明確な年代枠組みを提供している。」

イエスは三十歳のときに洗礼を受け、その後、一週間のあいだ、多くの人々と堅く契約を結んだ。

反キリストは、予言的にはキリストの型に従っている。そして、キリストが天の大祭司としての務めに就くための備えに三十年を要されたように、反キリストに割り当てられた三十年の準備の予言的期間は、508年に“daily”が取り除かれてから538年までであった。教皇制が偽りの大祭司として権威を与えられたのは、ちょうどキリストが洗礼のとき力によって油注がれたのと同様であった。教皇制の暗黒の1260年は、キリストが洗礼を受け

てから十字架に至るまでの純粋な光の1260日に並行し、1798年の教皇制の致命的な傷と一致する。

これまでに述べた三十年の期間から始まる二部構成の期間のいずれも、三段階から成る契約過程におけるアブラムの第一歩に先んじるものではない。したがって、最初に言及されるのはアブラムのものだが、そのように言えるのは、パウロの第二の証言によってそれが確認されてからに限られる。パウロがその言葉を記したとき、四百年の預言は四百三十年の預言となり、最初の三十年は後続の期間から区別された。

アルファとオメガとして表されているキリストの御性質に基づき、私は次のように主張する。三十年ののちに四百年が続くという、アブラムとパウロの二重の預言のオメガ的成就に当たる十四万四千の契約の過程においては、契約史のオメガ、すなわち十四万四千の封印の歴史の中に、それに対応するものが存在しなければならない。すなわち、三十年の期間に続いて、さらに別個の期間が、時間を適用しないかたちで成就しながら、同時にアブラムの根本的な四百三十年の預言を成就しなければならない。いまの文をもう一度読んでから、この箇所に戻って読み進めてほしい。

イエス、ヨセフ、ダビデ、エゼキエルは皆、終わりの日における神の民を象徴する働きのために三十年の準備期間を経た。エゼキエルは預言者、ヨセフは祭司であるキリストを型どり、ダビデは王である。四つの象徴があるが、そのうち天の大祭司を表す象徴だけは、人間の代表者と神的な代表者の二者がいる。これら四人の証人は皆、アブラムの三十年とそれに続く預言的な期間に一致している。

反キリストは三十年間の準備を経て、その後1260年間、1798年に最初の死を受けるまで権威が与えられていた。彼女は第二の死の象徴である。というのも、猶予期間が閉じられるとき、彼女は再び死ぬからである。第二の死は永遠の死である。私たちはよみがえられた救い主に仕える。キリストは永遠の死を遂げたのではなく、第二の死をお受けにならなかったからである。教皇制の致命的な傷が癒えるとき、黙示録13章は、彼女が再び四十二か月のあいだ支配すると示しており、それは時間的要素を伴わない預言的期間を表している。

日曜法が制定されるときに彼女が復活すると、彼女の働きに敵対する軍勢は、黙示録十一章の三日半の終わりに復活した者たちである。いずれも旗印である二つの復活した権力、一つは第七日の安息日の旗印、もう一つは太陽の旗印が、人類が生か死かの最終的な選択を行う際に、全世界の指標となる。

日曜法の時に、獣でもある反キリストは、竜、自身（すなわち獣）、そして偽預言者から成る三者連合を体現する。その三つの権力は、すべての山々の上に高く掲げられるはずの神の教会に対して結束する。勝利の教会は準備に三十年を要するが、この三十とは文字どおりの年数ではなく、「三十」が付与された既定の預言的期間を指し、預言的時の適用がもはや有効でないことを明らかにした1844年の命令の後も、預言として効力を保っている。三十年は、預言者・祭司・王が、勝利の教会として栄光の御国を表すための準備期間であることは容易に見て取れる。エゼキエル、キリスト、ヨセフ、ダビデという四人の証人は、教皇制と三者連合が世界をハルマゲドンへ導いているのと同じ時期に、神の御国の権威を表す。

凱旋する教会は、アメリカ合衆国における日曜法の時に高く掲げられ、旧約聖書と新約聖書の証しによれば、契約の民である十四万四千人は祭司の王国となる。

あなたがたも、生ける石のように、霊的な家に建て上げられ、聖なる祭司として、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊的ないけにえをささげるためである。  
第一ペテロ 2:5.

祭司たちは神殿で奉仕を始める際には三十歳でなければならなかったもので、日曜法に先立つある期間に、初穂の揺り動かす供え物として仕えるための祭司職が備えられる。契約の使者によって行われる清めの過程において、十四万四千人である祭司たちはレビ人として表されている。日曜法へと至る予言的な期間があり、その間の清めの過程によって、後の雨の時期のための聖別された奉仕が整えられる。準備は日曜法で終わるので、三十年という期間は祭司たちの準備を表し、したがって祭司に求められる年齢と符合する。大祭司としてのキリストは三十歳でその務めを始められ、またヨセフはキリストの型であるため、彼も三十歳で奉仕を始めた。偽キリストも三十年間の準備を経たので、三十年の期間が祭司職の準備を表すことについて、私たちには三つの証しがある。

「間近に迫っている重大な争点は、神が任命しておられない者たちをふるい落とし、神は後の雨に備えた純粋で真実で聖別された奉仕者たちを備えられるであろう。」『選ばれたメッセージ』第3巻、385ページ。

ホワイト姉妹は、教会が純潔であるときはいつでも預言の霊が働くと、はっきり教えている。重大な問題が毒麦をふるい落とすとき、あなたがたには、イエスと、神性と人性を併せ持つ祭司ヨセフ、イエスと預言者エゼキエル、イエスと王ダビデから成る聖別された奉仕が与えられる。三十年に象徴される期間にわたって備えられる者たちは、十四万四千人の中に数えられ、預言者、祭司、王として表される。これら三人はいずれも、預言者・祭司・王としてのキリストの働きの聖書的象徴であるから、三十という数は、三十年の備えを経た聖書的象徴によって生み出されるこれら三つの各範疇が、キリストと結び合わされるときに神性と人性の結合を表すのだと、私たちに推論させる。したがって、象徴的な三十年の期間にわたって備えられる祭司たちは、神性と人性が結合した旗印として表される。

最後の教皇権による血の惨劇の42か月は、キリストがその弟子たちを通して人々の間を42か月歩まれるのと同時に起こる。隷属と圧迫の42か月は、アブラムの二重の預言の430年によって表され、最後には解放で終わる。アブラムの400年は紅海での解放において終わり、それは教皇の象徴的な42か月の終わりにおける猶予期間の終結を示す聖書の古典的な例証である。

その四十二か月は、アメリカ合衆国における日曜法から、人類の恵みの時が閉ざされるまでの試練の時を表している。しかし、その四十二か月の間、三十年にわたる準備期間に続いて、キリストは残りの民において契約を確認しておられる。反キリストの偽の祭司は、キリストがその系統において死なれたまさにその所で最期を迎えるが、それはまた、エジプトの王ファラオがその系統において死んだまさにその所でもある。カルメル山ではバアルの預言者たちが殺されたが、これによって日曜法における偽預言者の死が示されている。日曜法においては、やがて殺される偽預言者、ファラオによって表される竜、そ

して教皇制によって表される獣がいる。これらはすべて、神の祭司・王・預言者と対立して、日曜法の場面で表されている。教会は日曜法の直前に清められ、偽預言者が死ぬまでにその所で預言の賜物が回復される。その時以後、戦いは真の預言的メッセージか偽のそれかをめぐりものとなる。

象徴的な30年の期間は、日曜法令に先行する期間を表している。その期間は祭司たちのための準備期間である。というのも、彼らは小羊に従う者であり、キリストは万事において彼らの模範だからである。アブラムの預言の最初の30年間のうちに、契約が確立された。したがって、アブラムのアルファの歴史が型として示すように、祭司の準備期間が何を表すにせよ、それは主が十四万四千人との契約を新たにされる時期であると認められる。その期間は、日曜法令の時、三十歳で奉仕を始める祭司たちのための準備の時であり、彼らは、キリストがバプテスマの時にそうであったように、聖霊によって油注がれる。アブラムのアルファの歴史から導き出せるもう一つの真理は、日曜法令へと至らせるその期間が何を表すにせよ、それは重大でなければならないということである。なぜなら、オメガは常にアルファよりも力強いからである。日曜法令は、1844年10月22日、十字架、エジプトでの過越し等々によって表されているオメガである。

日曜法は、三十年期間が指し示す時代の終わりを表しています。それは実質的に、ほとんどすべての主要な救いの物語で予表されており、また、アブラムに始まった選民の契約史の終わりでもあります。その時代の終わりに関するこの種の預言的証拠の重み、そしてその時代自体の重大な目的を踏まえるなら、起点はどこになるのでしょうか。

三十年で表される預言的な期間があり、多くの証拠に基づいてそれは日曜法で終わる。その時点から、さまざまな数値で示される期間が続き、それぞれが日曜法の後に続く預言史の系譜についての証しを立てている。それらの期間のうちには、教会史の内的な流れを表すものもあれば、ハルマゲドンへと進む世界の外的な流れを表すものもある。

この段階で、災厄の終わりにその日と時が告げられるまでは、終わりの時代におけるいかなる時の預言も特定できる日付を示すものとして適用することを、私たちは退けるのだという点を、あらためて心に留めておくのがよいでしょう。私は、もはや時の預言を適用しないという私の主張を示すために、ダニエル書12章を用います。12章には、時の預言を示す節が三つあります。

また私は、川の水の上にいる亜麻布をまとった人が、右の手と左の手を天に挙げ、永遠に生きておられる方にかけて、これは一時、二時、そして半時のあいだであると誓い、また、聖なる民の力を打ち砕き散らすことが成し遂げられるとき、これらすべてのことが終わると言うのを聞いた。ダニエル書12章7節。

そして、日ごとのささげ物が取り除かれ、荒廃をもたらす忌むべきものが据えられる時からは、千二百九十日ある。ダニエル書 12:11。

待ち望み、一千三百三十五日に達する者は幸いである。ダニエル書12章12節。

ミラー派は、これら三つの聖句それぞれを正しく理解していた。これら三つの預言は、基礎をなす真理の一部である。しかし、これらの聖句に対するミラー派の理解は、一日一年の原則の適用に基づいていた。「もはや時はない」ので、これらの聖句には別の適用がな

なければならない. というのも、すべての預言は後の雨の時期について語っているからである. これらの聖句は、時の計算を用いてメッセージを作ることのない後の雨の理解を持つと同時に、ミラー派の聖句理解と矛盾しないものでなければならない. 三つの聖句の中央の聖句（第11節）に関するミラー派の正しい見解は、それが二つから成る期間を表しており、最初に30年の期間があり、その後1260年が続くというものである. 第11節は、荒らす憎むべき者が立てられることによって表される日曜法に先立つ30年の期間を示している.

ダニエル書12章は、終わりの時、すなわちダニエル書の預言の封印が解かれる時に、神の民に起こる清めの過程を示している、神の御言葉の一章である. 11節には、1260年の期間へとつながる30年の期間として、先駆者たちが正しく理解していた預言が見いだされる. 12章では、7節、11節、12節の三つの預言は、終わりの時まで封印されている. 終わりの時には、それら三つの預言の封印は解かれなければならない. 神の御言葉は必ず成就するからである. まさにその章に、聖書における人類の恩恵期間の終わりの最も明確な描写が示されている. したがって12章は、アドベンチズムの始まりよりもむしろ、その終わりを、より確実にかつ具体的に指し示している.

ダニエル書12章にある三つの預言は、封印とその解除が預言的に最も基本的に定義されている、まさにその聖書箇所の中で封印された. これら三つの預言は、アルファとオメガがいつも物事の終わりをその始まりとともに示すゆえに、十四万四千の歴史において封印が解かれる. 十二章の三つの預言的期間で解かれるものは、神の預言のことばの最終的な封印の解除を表している. その解除は、猶予期間の終わりの直前に、イエス・キリストの黙示の封印が解かれるとき、黙示録1章において示されている. ダニエル書12章11節は、三十年の期間から始まる二重の預言についてアブラムとパウロが最初に示した表現に対応している.

ダニエル書12章にある三つの預言は、終わりの時の最終時点で封印が解かれる象徴的な期間であり、その解封は神の民の最終的な清めへと導く. その三つの預言の最初のものはキリストご自身によって与えられており、彼がその預言を示されるとき、亜麻布をまとして水の上に立ち、1260年として表される預言的期間の終わりを指し示すとともに、その期間の終わりを、神の民の力が散らされることの終結として定めている. 終わりの時代の神の民は十四万四千人であり、彼らは散らされてきた.

キリストは水の上に立って問いに答えているだけでなく、その問いは「いつまでか？」という言葉で始まっている. 「いつまでか？」は預言的な象徴であり、ダニエル書8章13節においても、イエスに対して「いつまでか？」と問われている.

そのうちの一人が、川の水の上にいた亜麻布を身にまとった人に言った. 「これらの不思議の終わりまでには、どれほどの時がかかりますか.」

そして私は、川の水の上にいた亜麻布の衣を着た人が、右の手と左の手を天に挙げ、永遠に生きておられる方にかけて誓い、「それは一時と二時と半時であり、彼が聖なる民の力を打ち砕いて散らし終えるとき、これらすべてのことは終わる」と言うのを聞いた. ダニエル書12:6、7.

ヒデケル川の幻では、亜麻布の衣を着た人として表されたイエスに対して「これらの不思議の終わりまで、どれほどの時でしょうか」と問われ、ウライ川の幻では、パルモニ（あの特定の聖なる者）として表されたイエスに対して「日ごとの献げ物と荒廃をもたらす背きに関するこの幻は、聖所と軍勢が踏みにじられるように引き渡されることについて、どれほどの期間続くのでしょうか」と問われています。

ホワイト姉妹は、シナルの大河のほとりでダニエルに与えられた幻がいま成就しつつあり、また両方の河の幻に関連して、イエスに預言的な「問い」が発せられ、その「答え」としてはつねに日曜令が示されると述べている。しかし、その両方の答えは、1844年に終わった時の預言の枠内で提示されている。先駆者たちは、第八章の問いとウライ川の幻に対する答えを正しく見極め、1798年が神の民の力の散らしが終わった時であると理解していた。だが1844年以降、神の預言の御言葉の「時の適用」が終わったのちには、預言的な「いつまでか」という問いは、先駆者の理解を次のように言い換える。すなわち「二千三百日に至るまで、やがて来る日曜令の時に聖所は清められる」、そして「ダニエルの最後の幻にある『すべて』の『驚くべきこと』が成し遂げられる」のは、聖なる民が象徴的な三日半のあいだ散らされることが終わるときである。

ダニエル書の最後の三章におけるヒデケル川の幻と、第七章から第九章にかけてのウライ川の幻を、ホワイト夫人は「シナルの大河」であるとしている。歴史学者および聖書学者は皆、シナルに関連づけられる川は二つしかなく、しかもいずれも大河であると認めている。その二つの川はティグリス（ヒデケル）とユーフラテスである。ウライ川はシナルのユーフラテスではなく、シナルではなくペルシャにある人工の小さな運河状の川である。アドベンチズムの基礎と中心的な柱を含む幻に登場するウライ川はシナルには位置していない。それにもかかわらず、ホワイト夫人はウライを、シナルの大河の一つであるユーフラテスと同一視している。

ヒデケルの幻視は、世界をハルマゲドンへと導く竜・獣・偽預言者の外面的な歴史を示し、ウライの幻視は、キリストがその神性と人性を結びつける御業を表している。預言的靈感は、ユーフラテス川とともにウライ川を第二の証人として用い、キリストが神性と人性を結びつけて成し遂げる御業を指し示している。

ユーフラテス川とチグリス川はいずれもエデンに端を発し、契約の歴史の全期間を貫いて流れている。1844年10月22日にそれらがアドベンチズムの中心的な柱へと流れ込むとき、ユーフラテス川は人造のウライ運河と結び合わされ、神性と人性の結合を表す。それは、十四万四千人として表される人々における信仰の行使によって成し遂げられる。ウライは、神の預言の言葉の權威に対する試金石である。というのも、それは、ペルシャのウライ川をシナルの大河の一つと同定したエレン・ホワイトの權威を、世界の専門家たちの見解と対立させることになるからである。

ウライ川の象徴は、人の言葉か神の御言葉かを試すものを表している。人間が正しいのか、それともシスター・ホワイトが示した言葉が正しいのか。ウライ川はペルシアにある一本の川を指すのか、それともエデンの水と人の水が混ざり合って成る預言的な川を表しているのか。

私が提起したこのジレンマには多くの考え方があるかもしれませんが、趣旨を分かっていたくためにいくつか考えを述べます。世の歴史家や神学者は正しく、ホワイト夫人が間違っているのでしょうか。『シナルの大河』がチグリス川とユーフラテス川であることに異議を唱える人はいません。では、ホワイト夫人がペルシアのウライ川をシナルの大河の一つとして特定しているなら、彼女は偽預言者なのでしょうか。それとも、彼女は真の預言者だが誤りを犯したのでしょうか。真の預言者が一線を越えて偽預言者になってしまうのは、どれほど多くの誤りを犯したときでしょうか。あるいは、歴史家たちの方が間違っているのでしょうか。もしくは、彼女の方が実は正しいのでしょうか。それとも、歴史家たちもホワイト夫人も双方とも正しいのでしょうか。私がこのジレンマを取り上げたのは、ヒッデケル川とウライ川の幻の双方で「いつまでか」と問われる、亜麻布を着て川の上に立つ方についての補足的論点として、このジレンマの説明を用いるためです。

ダニエル書第8章で、ダニエルはペルシャのスサにおり、スサはウライ川のほとりにある。そこでは農業のため、自然の川に加えて一連の人工の導水路も設けられている。ウライ川はさらにおよそ150マイル下って、チグリス川とユーフラテス川の合流点に達する。エデンに発したチグリスとユーフラテスはやがて合流し、そのときペルシャから来たウライ川も同じ地点でつながる。チグリスとユーフラテスの合流点で、ウライ川がチグリス川の湿地帯の水系に合流すると、ウライはシヌアルの大河を成す水の一部となる。歴史家たちは正しく、ホワイト姉妹もまた正しい。

ホワイト姉妹が第八章でウライ川の幻を指し示すとき、彼女が指しているのは、ティグリス川とユーフラテス川を結ぶ人工の導水路システムで知られる川であり、この二つの川は、1798年と1844年にそれぞれ終結した2520年の二つの期間を表している。

チグリス川の古名はヒデケルである。また、ユーフラテス川との関係において、両河川はアッシリアとバビロンに結び付けられるものとして、預言的に明確に位置づけられてきた。そこでは、彼らは神の羊を懲らしめる二頭の獅子としても同定されている。その二つの荒廃させる勢力は、異教ローマと教皇ローマという二つの荒廃させる勢力を予表しており、それは男と女、すなわち教会と国家の象徴である。異教ローマは国家統治術を体現する男であり、教皇ローマは教会統治術の汚れた女である。預言的な関係においては、アッシリアが男、バビロンが女であり、したがって、チグリス川が男、ユーフラテス川が女と同定される。

ティグリス川は1798年にまで達する国家統治の川であり、ユーフラテス川は1844年にまで達する教権の川である。ユーフラテスは1844年にまで達していなければならなかった。というのも、1844年のメッセージはバビロン（すなわちユーフラテス）に関するものであり、それは1844年に再び倒れたからである。ユーフラテスが1844年に滝を生じたとき、人間のわざの象徴としてその合流に加わっていたウライ川が、ほかの川の水と合わさった。国家統治の川は1798年にせき止められた。そのとき、教皇権から世俗権が取り上げられたからである。同年、アメリカ合衆国は地の獣にして聖書預言の第六の王国として君臨し始める。ティグリス川は1798年のところでせき止められている。そこは、やがて国家が、いまや世界を圧倒的な洪水のように襲おうとしている教皇の迫害の奔流を食い止めているそのダムを、全世界に打ち壊させることを強いることになる、まさにその地点である。その壁、すなわちダムは、政教分離の壁である。

1844年に、ユーフラテス川とウライ川の双方は、1844年のメッセージがバビロンの倒壊であること、そしてそれがまた、契約の使者としてのキリストが1844年に始められたまさにその御業であることを示している。すなわちキリストは契約の使者として、ご自身の聖所に入ろうとしていた—至聖所に入る前に清めを必要としていた—民の中から、バビロンの水と人間の業を洗い清めて取り除かれた。その民の最終的な清めは、「真夜中の叫び」のメッセージのもとに注がれた雨によって成し遂げられた。そしてその「真夜中の叫び」のメッセージの雨粒は、ミラー派が教皇ローマと1798年を特定し、またバビロンの倒壊を特定し、「閉ざされた戸」に先立ってそのメッセージによって清められたときのように、チグリス川の水から蒸留されたものだった。あるいはこう言える—彼らがダニエル8章14節のメッセージを宣べ伝え、反型の贖罪日の開幕に先立って「真夜中の叫び」のメッセージを成就したとき、ウライ川とチグリス川とユーフラテス川の水を蒸留して生じた雨によって清められたのだ、と。

ダニエル書12章7節でキリストがヒデケルの水の上に立っておられるとき、彼が立っておられるのはチグリスの水であり、それは、猶予期間の終わりへと至る人間の統治の最終的な動きを描き出すその幻において、統治を象徴する水である。彼はそこで、直前の節の問いに答えておられる。ちょうどウライ川の幻において、亜麻布を着た人、すなわちここでは驚くべき数え手パルモニが、直前の節の問いに答えるのと同様である。いずれの場合も、その対話は天使たちとキリストの間の天的な対話であり、いずれの場合も、問いは「いつまでですか？」である。

答えは二千三百日までであり、第八章と第十二章では「一時と二時と半時」である。その答えは二千三百年と千二百六十年と理解されてきたが、1844年に神は預言的メッセージにおける時の適用に禁令を置かれた。というのは、時はもはやないからである。亜麻布を着た人パルモニがご自身の最後の世代のために与える答えは何か。「いつまでか」という問いは、多くの証言によって、その答えが日曜令であると示されてきた。では、聖所は日曜令の時に清められるのか、また「これらすべての不思議」は日曜令の時に終わるのか。日曜令の時に終わる「不思議」とは何であり、それらの「不思議」はいつ始まったのか。

そのとき、私ダニエルが見ると、見よ、ほかに二人が立っており、一人は川の岸のこちら側に、もう一人はその向こう側にいた。するとそのうちの一人が、川の水の上にいる亜麻布の衣を着た人に言った。「これらの不思議な出来事の終わりまで、どれほどの時があるのでしょうか。」

そして私は、川の水の上にいる亜麻布の衣をまとった人が、右の手と左の手を天に挙げ、永遠に生きておられる方にかけて誓って言うのを聞いた。「それは一時と二時と半時である。聖なる民の力を散らすことを成し遂げるとき、これらのすべてのことは終わる。」ダニエル書 12:5-7。

「いつまでか？」という象徴的な問いは日曜法を指し示しており、天使が尋ねたのは日曜法がいつかではなく、「不思議」の終わりがいつかであった。「不思議」は日曜法の時に終わるのだから、では日曜法へと導く「不思議」とは何なのか。あるいは、より具体的に言えば、ダニエル書の十章から十二章に示され、ヒデケルのほとりで与えられた幻において表されている「不思議」とは何か。「不思議」とは何かを特定できれば、「不思議」がいつ始まるかも見いだせるかもしれない。ダニエル書十章で、ガブリエルは、幻の最

中にダニエルと関わった際の自らの目的を明確に示している。

今、私は、後の日にあなたの民に何が起こるかをあなたに悟らせるために来た。というのも、この幻はなお多くの日の後のことに関わるからである。ダニエル書 10:14

ガブリエルは、終わりの日々に何が彼らに起こるのかを神の民に理解させるために来た。ミラー派がダニエル書12章の予言を正しく理解していたと認めながら、その事実をもってこの章の終わりの日々への適用を否定することは、ガブリエルが明言した目的を挫くことになる。ガブリエルが11章1節から12章3節に至るまで預言的叙述を始めると、その示す歴史は、竜と獣と偽預言者がいかに世界をハルマゲドンへ導くかという、外的な預言の細部である。その中には神の民が迫害されると描く箇所もあるが、11章の歴史は主として外的な啓示である。したがって、ダニエルの最後の幻の中で10章と12章はアルファとオメガを表す。というのも、11章と異なり、両章は十四万四千人の封印を指し示す内的なメッセージを語っているからである。中間の章は、北の王、すなわちローマの教皇によって表される人類の反逆であり、アルファである10章とオメガである12章は、終わりの日々における十四万四千人の内的経験を明らかにする。これら三つの章はいずれも恩恵期間の終結へと至る。アルファの章は、礼拝者を二つの種類に分ける神への恐れから始まり、章の終わりにはダニエルに力の倍加が与えられる。こうして第一と第二の天使のメッセージが示される。12章はオメガの章であり、第三の天使の審判のメッセージを示す。

第十一章は、エルサレムの滅亡から猶予期間の終わりに至るまでの人類の反逆を詳述しており、シスター・ホワイトによれば、それは世の終わりにおける猶予期間の終わりの一つの例証である。ダニエル書第十一章はエルサレムの滅亡から始まる。というのも、ダニエルは、エルサレムの三度にわたる滅亡の際にバビロンへ連行された者の一人であり、その三度の滅亡は、紀元70年に同じ都が滅ぼされることを象徴し、さらに終わりの日には世界を代表するかたちで再び起こることを示していたからである。

エルサレムは、六百六十五年の間隔をおき、いずれも一年の同じ日に、文字どおり二度滅ぼされた。それら二度の滅亡は、契約の箱があるはずだとされていた都市の滅亡であった。シロも同じ預言的特質を備えており、神の臨在があった、あるいはあるはずだった都市が初めて滅ぼされたことを表している。ホワイト夫人がエルサレムの滅亡を終わりの時代の滅亡の象徴として用いるとき、彼女はエルサレム滅亡に関するキリストの説教について論評しているのである。

シロ、そしてネブカドネツアルとティトウスのもとでのエルサレムの滅亡は、神の都の滅びによって表されているように、終わりの時代の三つの証しである。シロは第一の天使のメッセージであり、神を恐れ（エリはそうしなかった）、神に栄光を帰せよ（これもエリはしなかった）、神の裁きの時が来たからである、と教える。第二の天使のメッセージには、ネブカドネツアルとティトウスによって表される二重性が見られる。終わりの時代における第三のエルサレムの滅亡は、恩恵期間の終わり、すなわち審判の終結のときである。

第十一章は三天使のメッセージの外的歴史である。それは、第十章の分離の幻と、ダニエルの幻の第二十二日目にかかる三度の力づけの触れとのあいだに挟まれている。これは、第十二章もまた、終わりの日に神の民に降りかかることの内的な物語についてである。

とを意味する。また、第十二章の中にある光は、第十章の光よりも二十二倍も輝かしいということでもある。

ウライ川の幻において、キリストもまた「いつまでか」と問われた。十三節の問いへと至るその前の十二節は、聖書の預言における諸権力の重要な細部を示す外的な預言史を特定していた。それらの十二節は、第七章に表されている歴史を、単に繰り返し、さらに詳述していた。それらの節で提示された預言史は、メディアとペルシャの時代から始まる第十一章において、繰り返され、さらに詳述されている。第八章の後半と第九章全体は、預言者ダニエルによる神の終わりの日の民の表象である。ウライ川の幻における三章にわたる預言史の幻と、ガブリエルとダニエルのやり取りを通して各章に示される神の民の表象とは、十章から十二章にかけての全体の初めから終わりまでを形づくっている。

ヒデケルがオメガであり、ウライがアルファであるゆえに、終わりの時が到来すると第十二章で封印が解かれる光に表される力は、アドベンチズムの中心の柱であり基盤である幻よりも二十二倍明るい。したがって、ダニエルの最後の幻の光は、終末の日々における神の民に結びつく光として直接に同定される。天使が亜麻布を着た人に「いつまでか、この不思議の終わりまで」と尋ねるとき、その不思議とは、アブラムの契約の歴史がアブラムに星を仰ぎ見るよう命じた言葉の響きを反映して、永遠にいつまでも星のように輝く者たちのことである。ダニエル十二章における不思議とは、人間が十四万四千人の旗印となるように変容することを指す。

以前の箇所で、ダニエル書12章11節が二つの期間から成る預言的な時期を示しており、その第一は三十年であることを明らかにした。十一節に適切な焦点を当てるために七節を取り上げたのは、終わりの日にご自分の民の間で行われる驚くべき御業にキリストが直接かかわっておられることを示すためであった。

11節に戻るにあたり、十二章はガブリエルによって直接「終わりの時」と呼ばれていることを思い起こしていただきたい。十四万四千人の時代、すなわち彼らが封印され、神と契約に入る時代には、ダニエル書によれば、封印の解かれるメッセージが現れ、それが高まって大いなる叫びとなる。そのメッセージは十二章において三つの明確な預言的期間によって表されており、それらはすでにミラー派によって定義され、その後『証の霊』によって支持された。だが、それら三つの期間は時間そのものを表してはいない。というのも、十二章で両手を天に挙げている同じ天使が、黙示録十章では片手を天に挙げ、もはや時が延ばされることはないと言ったからである。1844年のその宣言は、ダニエル十二章の三つの預言的期間が、時間を表すことを意図しない象徴的な期間であることを意味する。

したがって、ダニエル書12章における中間の象徴的預言期間が、ミカエルが立ち上がるまさにその章で三十年から始まる二段階の期間であるとき、三十年から始まるその二段階の期間こそがアブラムのアルファの預言の完全な成就であるとわかる。選民という観点から契約史を開始する時の預言のオメガは、終わりの日に神の民に何が起こるかについてのダニエルの証言の頂点である同じ章において、完全な成就に至る。

終わりの時に、ダニエル書の封印が解かれ、そこから生じる光が神の民に印を付ける。終わりの時に、ダニエル書の封印が解かれ、その光はダニエル書の最後の章にある三つの

預言的期間によって表されている。その章は、ヒツデケルの幻を構成する三つの章の「オメガ」であり、ヒツデケルの幻は、ダニエル書における川の幻の「アルファ」を表す三つの章に対する「オメガ」である。エデンに始まった川々は、ついにはダニエルへと行き着き、そして神の預言のことばはそれらを、第一と第二の天使のミラー派運動、すなわち三天使の二つの運動のアルファへと導いた。第十一節の1290年は、アブラムとパウロの四百三十年の預言に対するオメガである。

ダニエル書12章とそれがアブラムの預言とどのように結び付くかを読み進める前に、パウロがどのような人物であったかを思い起こしておくといよい。パウロは異邦人への使徒であっただけでなく、同じくらい重要なことに、神の預言的な御言葉を通して自らのメッセージを語った。さらに重要なのは、パウロが経綸的預言者であったということである。経綸的預言者とは、モーセのように祭壇での礼拝から聖所での礼拝へ、またバプテスマのヨハネのように地上の聖所から天の聖所へと、一つの経綸から別の経綸へ神の民を導くために立てられた預言者のことである。パウロは、字義的な事柄の霊的適用に関する情報と原則を、他の聖書著者をすべて合わせたよりも群を抜いて多く記した。彼は、神の契約の民という文脈において、字義的なものから霊的なものへの移行を説明するために立てられたのである。

パウロは、選民が文字どおりの民から霊的な民へと移行したとき、アブラハムの選民に与えられた契約の約束をつなぐ存在である。契約史におけるパウロの役割の理解が定まっていなければ、神の契約の民に関する最初の時の預言が、30年の期間で始まる二重の時の預言であることが、いかに神的にふさわしいかを見いだせないかもしれない。ひとつは選民の父によって据えられた預言であり、彼らが霊的な選民へと移行するときには、その移行を特定し説明するための経綸的な預言者が起こされ、さらに旧約の第一の証言に一致する新約からの第二の証言によって、アブラムの時の預言が確証された。初めにアブラム、そして終わりにパウロが、終わりの時の「1290」の意義を型として示している。

続きは次回の記事でお届けします。

ゼカリヤが見たヨシュアと御使いの幻は、大贖罪日の終幕の場面における神の民の経験に、格別の力をもって当てはまる。その時、残りの教会は大いなる試練と苦難に置かれることになる。神の戒めを守り、イエスの信仰を持つ者たちは、竜とその軍勢の激しい怒りを身に受ける。サタンは世界を自らの臣民として数え、キリスト者であると公言する多くの者にさえ支配を及ぼしている。だがここに、彼の支配権に抗している小さな群れがいる。もし彼が彼らを地の面から消し去ることができれば、彼の勝利は完全なものとなるだろう。かつて彼が異教諸国をそそのかしてイスラエルを滅ぼさせたように、近い将来、彼は地上の悪しき権力を扇動して神の民を滅ぼそうとする。人々は神の律法に反する人間の法令に服従することを求められるようになる。

神に忠実な者たちは、脅かされ、糾弾され、排斥されるだろう。彼らは「親にも、兄弟にも、親族にも、友人にも裏切られ」、死に至ることさえある。ルカ 21:16。彼らの唯一の望みは神のあわれみにあり、唯一の守りは祈りである。ヨシュアが御使いの前で嘆願したように、残りの教会も、砕かれた心と揺るがぬ信仰をもって、自らの弁護者であるイエスを通して赦しと救い出しを嘆願するであろう。彼らは自分の生涯の罪深さを痛感し、自らの弱さと値しなさを認め、今にも絶望に陥りそうである。

誘惑者は、ヨシュアに敵しようとしてそばに立ったときのように、彼らを訴えようとしてそばに立っている。彼は、彼らの汚れた衣、欠けた品性を指し示す。彼は、彼らの弱さと愚かさ、恩知らずの罪、キリストに似ていないこと—それは彼らの贖い主を辱めてきた—を突きつける。彼は、自分たちの境遇は望みがなく、汚れのしみは決して洗い流されないという思いで彼らを恐れさせようと努める。こうして彼らの信仰を打ち砕き、自分の誘惑に屈して、神への忠誠を捨てるようにさせることを望んでいる。

サタンは、自らが神の民に犯させるよう誘惑してきた罪を正確に知っており、彼らに対する告発を強く主張して、彼らはその罪のゆえに神の保護を失ってしまったと宣言し、さらに自分には彼らを滅ぼす権利があると主張する。彼は、彼らも自分と同様に、神の恵みから退けられるに値すると断定する。「これらの者が、天において私の地位、そして私に加わった天使たちの地位を継ぐべき民なのか。彼らは神の律法に従うと公言するが、その戒めを守ってきたのか。彼らは神を愛するよりも自分を愛する者ではなかったか。彼らは自らの利害を神への奉仕よりも上に置いてこなかったか。彼らはこの世のものを愛してこなかったか。彼らの生涯に刻まれてきた罪を見よ。見よ、彼らの利己心、彼らの悪意、互いへの憎しみを。神は私と私の天使たちを御前から追放しながら、同じ罪を犯してきた者たちをなお報いるというのか。主よ、正義においてあなたはこれをなさることはできません。正義は、彼らに対して判決が下されることを要求します。」

しかし、キリストの信徒たちは罪を犯してきたとはいえ、サタンの勢力の支配に身を委ねてしまったわけではない。彼らは自らの罪を悔い改め、謙遜と痛悔のうちに主を求め、天の弁護者が彼らのために執り成しておられる。彼らの忘恩によって最も傷つけられ、彼らの罪もまた悔いも知っておられる方が、こう宣言される。「主があなたを戒める、サタンよ。わたしはこれらの魂のためにいのちを捧げた。彼らはわたしの手のひらに刻まれている。彼らには品性に欠けているところがあるかもしれないし、努めにおいて失敗したことがあるかもしれない。しかし彼らは悔い改め、わたしは彼らを赦し、受け入れた。」

サタンの攻撃は激しく、その惑わしは巧妙である。しかし、主の御目は御自分の民の上にある。彼らの苦難は大きく、炉の炎が今にも彼らを焼き尽くしてしまいそうに見える。しかしイエスは、火で試された金のように彼らを取り出してくださる。彼らの地上的なものは取り除かれ、彼らを通してキリストの御姿が完全に現される。

時として、主はご自身の教会の危機や、敵によって加えられた損害をお忘れになっているかのように見えることがある。しかし、神はお忘れになってはいない。この世で、神がその御心に最も大切にしておられるのは、ご自身の教会である。世の打算や方策によって教会の証しが汚されることは、神の御心ではない。神はご自分の民がサタンの誘惑に打ち負かされるままにはされない。ご自分を誤って伝える者を罰せられるが、真実に悔い改めるすべての者には恵み深くあられる。キリスト者としての品性を形成するための力を求めて神を呼び求める者には、必要な助けをすべてお与えになる。

終わりの時に、神の民はこの地で行われる忌むべき行いのゆえに嘆き、泣き叫ぶ。彼らは涙をもって、神の律法を踏みにじることの危険を悪しき者に警告し、言い尽くせぬ悲しみのうちに、悔い改めて主の御前に身を低くする。悪しき者は彼らの悲しみをあざけり、その厳粛な訴えを嘲笑う。しかし、神の民の苦悩とへりくだりは、罪のゆ

えに失われた力と品性の高潔さを彼らを取り戻しつつあることの、紛れもない証拠である。彼らがこのように罪のきわめて罪深いことをはっきりと悟るのは、キリストにますます近づき、その完全な清さに目を注いでいるからである。柔和と謙遜こそ成功と勝利の条件である。十字架のもとにひざまづく者には、栄光の冠が待っている。

神に忠実に祈る人々は、いわば、神と共に囲いの内に置かれている。彼ら自身は、自分たちがどれほど堅く守られているかを知らない。サタンに駆り立てられて、この世の支配者たちは彼らを滅ぼそうとしている。しかし、もしドタンでエリシャのしもべの目が開かれたように、神の子らの目が開かれるなら、彼らは自分たちの周りに陣を敷き、闇の軍勢を押しとどめている神の御使いたちを見るだろう。

神の民が御前で自分の魂を苦しめ、心の清さを嘆願するとき、「汚れた衣を取り除け」との命令が下され、また励ましのことばが語られる。「見よ、わたしはあなたの咎を取り去った。あなたを新しい衣で装わせる」。ゼカリヤ書 3:4。キリストの義の汚れない衣が、試練と誘惑にさらされながらも忠実であった神の子らに着せられる。蔑まれていた残りの者たちは栄光の装いをまとい、もはや世の墮落によって汚されることはない。彼らの名は小羊のいのちの書にとどめられ、あらゆる時代の忠実な者たちの中に名を連ねる。彼らは欺く者の策略に抗い、竜の咆哮によってその忠誠をくつつがえされることはなかった。今や彼らは誘惑者の企みから永遠に守られている。彼らの罪は罪の元凶に移される。「清いターバン」が彼らの頭に載せられる。

サタンが自らの訴えを押し立てている間も、目に見えぬ聖なる天使たちは行き巡って、忠実な者たちに生ける神の印を押している。彼らこそ、小羊とともにシオンの山に立ち、その額には御父の名が記されている者たちである。彼らは御座の前で新しい歌を歌う。その歌を覚えることができるのは、この地から贖い出された十四万四千人のほかにはいない。「彼らは、小羊がどこへ行かれるにも従って行く者たちである。彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にささげられる初穂とされた者たちである。彼らの口には偽りが見いだされず、神の御座の前で傷のない者たちである。」黙示録 14:4, 5。

今や、御使いの言葉が完全に成就した。「大祭司ヨシュアよ、今聞け。あなたと、あなたの前に座しているあなたの仲間たちよ。彼らは驚くべきしるしとなる人々である。見よ、わたしはわがしもべ『枝』を起こす。」ゼカリヤ書 3:8。キリストは、ご自分の民の贖い主、解放者として現される。今やまことに、残れる者たちは「人々の驚きの的」となる。彼らの旅路の涙と屈辱が、神と小羊のみ前で喜びと誉れに取って代わるからである。「その日、主の枝は麗しく栄光に輝き、地の実りはイスラエルの逃れの者たちにとって優れて美しいものとなる。やがて、シオンに残された者、エルサレムにとどまる者は聖と呼ばれ、エルサレムで生きる者として名を書き記された者は皆そう呼ばれるようになる。」イザヤ書 4:2, 3。『預言者と王たち』587-592。